この人を訪ねて＃220

お笑いワンマンショー・一人芸を演ずる

田中正憲（たなか まさのり）さん75歳

古来から洋の東西を問わず、楽器演奏、口上売りなど路上でパフォーマンスする「大道芸」がある。真田 決（また きます）こと田中正憲さんは、勤めていた会社の忘年会の寸劇をきっかけに、〝人を喜ばす〟ことに〝快感〟を覚えた。いまでは「お笑いワンマンショー・一人芸をボランティアとして、各地の公民館や施設などを巡り披露している。

大道芸「バナナの叩き売り」だ！

「さあ買（こ）うた、さあ買うた」「色良し、味よし器量よし～」「♪春よ三月　春雨に弥生のお空に桜散る～」。ここ草津公民館の一室、まさにいま〝バナナの叩き売り〟が始まった。「金波銀波の波を越え　難難辛苦のあかつきに　ようやく着いたが門司ミナト～」「味はヤマトの吊るし柿　一皮むけば雪のはだ　千円！…高い？そいじゃあ負けて六百円！まだか！五百円でどうじゃ…はい！そこのおねーちゃん　アリガトウ！」と大房のバナナを手渡す。七五調の口上にのせて、演ずるは「真田 決（またきます）」さんこと田中正憲さんだ。

暑れも押し迫った12月21日（土）草津公民館さつき学級主催で、田中さんの「お笑い一人芸」が行われた。

田中さんは一時間半のあいだに、津軽三味線、尺八、ウクレレ、バナナの叩き売りや男女ひとり歌謡など8種目を演じた。コロナ禍で人数制限されたものの、会場の皆さんは、腹をかかえ、中には涙を流しながら大笑いされていた。まさに「人を喜ばす」狙い的中だ。

波乱万丈の人生が始まる

『波乱万丈』という言葉がある。田中さんのいままでの苦労した生き方に当てはまるに違いない。が、プライバシーもあり、そのためインタビューの中に記載できないものがあるのでご了承のほどを。

1947年（昭和22年）兵庫・豊岡市生まれ。3人兄妹の長男で、父は三菱精錬所の鉱山技師だったが、子ども達がまだ幼い時に亡くなった。1966年地元の高校から、広島大学工学部工業教員養成課程（3年制）に入学。就職も決まり、あと一枚製図をを提出すればあと3ケ月で卒業というときに、田中さんはとんでもない事態を引き起こした。

若気のいたり　駆け落ちに

それまで付き合っていた女性と駆け落ちをしたのだ。「彼女が家に帰りたくない、川に飛び込んで死ぬまで御幸橋の上で言い出し、仕方なく熊本にかけ落ちしました」とかく男女の仲は理解できないのだが…。年末年始の石油スタンドの倍支給のアルバイト代を握りしめて一月の初め、二人は熊本市にかけ落ちした。二ケ月後心配している田中さんの母親に呼び戻され故郷に帰った。一年間地元の石油スタンドに勤めたが、同じ働くならと、ひとり身の母親を連れて、広島のかってのアルバイト先に転職した。女性とは結婚し、2女をもうけた。

〝引っ張られ〟が習い性に

しばらくして他の石油スタンド会社に所長候補で引っ張られたが、前任の所長が運送会社を始めるので、資材を運ぶ運転手としてまた引っ張られた。田中さんの話を聞いていると、〝引っ張られた〟という言葉は多く出る。多分田中さんという人は、気が利いて、すぐ仕事をこなす、人が欲しがる人物なのかもしれない。

ある時妻の兄が「ギフト」の仕事を始めるので手伝ってほしいといわれ、手伝うことになった。以後「ギフト」は田中さんの後々の仕事のメインになる。「ギフト」はノベルティー・グッズと言って宣伝のため、社名商品名を記して顧客に配布する品物である。

肺結核を10ケ月で治す

6年目に義兄は手形の不渡りをだし、やり方等で意見が衝突。また妻に同居している母親の面倒を頼んでいたのにしておらず、けんかになり別れてしまった。

田中さんは独立したものの、自分も失敗。千八百万円余りの借金を作ってしまった。そのころ悪いことに、田中さんは微熱が続き、かかりつけの医者は肺結核と病名を告げた。ここから田中さんの本領が出る。特効薬を一度に50本も買占め、医者に打ってもらって、「10ケ月で治しました」と。

サラリーマンとスタンドマスターの二刀流

「ギフト」を手広くやっている広島・西区南観音にある「八大」に1989年（平成元年）に勤めはじめる。借金のある田中さんは、夜は舟入町にあるスタンドバーのマスターとして働き、二刀流で2年間で借金を返した「この頃から睡眠時間は3時間です。今でも3時間ですよ（笑）」とそれでも大丈夫だとケロッとして話す。この間に再婚し、子供3人をもうける。しかしあることからこの結婚は10年しか続かなかった。

やっと平穏な生活が

またまた田中さんに〝引っ張られ〟があった。四国・高松の葬祭用品会社で「冷凍棺桶」を葬儀屋に巡回販売する仕事だが、社長の経営方針に反発し6ケ月で辞め、再び「八大」に復帰し、2012年の定年退職まで24年間勤めた。その後「シーガル」というギフト会社を友人二人で立上げる。2年前、74才のとき懇意にしている「東洋紙商事」の代表者に〝引っ張られ〟若手社員に同行しギフト販売のノウハウを教えている。

忘年会の余興がことの始まり

『人を喜ばす』のきっかけは、八大につとめていたとき、忘年会の余興で部下と一緒に国定忠治などの寸劇をやったのが始まり。これが好評で凝り性の田中さんは、楽器経験がないのに津軽三味線を師匠について習い始めた。ある時同じパターンの演目を演じる他の人の舞台を見ていると、観客は〝飽きてき〟だした。もし自分なら、色いろ目先をかえて、飽きの来ない出し物にしなければと、一人でもできる演目を次々練習しだした。「今でも毎夕、近所の山の上の公園に車を止め練習していると、お巡りさんが、おやじ狩りに気を付けてと注意をしてくれますし、信号待ちの暇に尺八の練習している横に付けた車の人は笑っています（笑）。何しろ楽器は音が出ますから、もっぱら車の中です」。

今では楽器のレパートリーは、津軽三味線、尺八、ハーモニカ、サックス、ウクレレなどで、車にはその日の演目に合わせた衣装も入れ、びっしり積んでいく。

アイディアが次つぎに浮かぶ

なぜ儲けにもならないのに、やるのかと聞くと、「好きなんじゃろうな、人を喜ばすことが…。こうした方がいい、ああすればもっと面白くなる…とアイデアが次々浮かぶんです（大笑）」と田中さんは屈託なく話す。一番こ本人がうれしく楽しんでいるに違いない。

「バナナの叩き売り」とは

田中さんのメイン演目の一つである。公演の朝、市場に行きバナナを仕入る。講演料はボランティアのため、些少で毎回赤字である。

★大道芸の一つである映画寅さんでおなじみの「バナナの叩き売り」は、俗に『啖呵売（たんかばい）』ともいう。★ルーツ：冷凍手段の乏しい明治の終わり頃、台湾から運んできたバナナが輸送中に通常販売に適さなくなり、門司港に荷揚げされ露天商の手に渡り、バナナが叩き売りされた。現在では門司港の無形文化財として、連合会まで組織化され継承されている。★ちなみに生産国一位はインドで、二位は中国、国内で一番消費量の多いのは広島県とクイズを出し説明する。

コロナに感染

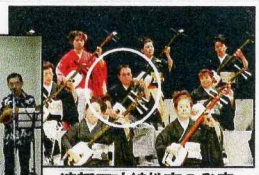
昨年7月、田中さんはのどが痛くコロナに罹ったと診断された。自宅療養もあったが、食料支援物資が不足していたので、中区中電前の病院に5日間入院した。本も読む気にもならず退屈で、仕出し弁当にもすぐ飽きてしまいインスタントの「どんべい」が旨かったそうだ。退院後一ヶ月ぐらい味覚が戻らず、5キロぐらい体重が減ったという。

99才までパフォーマンスをし、130才まで生きる

「過去に色々ありましたが、振り返りませんし気にしません」「目標は130才まで生きることです。99才で舞台に立つころには、年上の人はおらず、年下の人に『こんな年寄りが頑張っているのだから、皆さんもがんばってください』というのが夢です」と目を輝かす。いま公演依頼が次々入っている。3時間の睡眠は短いのでは？　無理は禁物ですよ。（編集 倉田和峰）

田中正憲
（たなか　まさのり）
広島市西区己斐上五丁目在住 兵庫・豊岡市1947年5月生まれ広島大学工学部教員養成課程中退。広島市内の石油スタンド等を経て、「八大」(株)を'12年定年退職。ギフト業を共同経営し'22年7月東洋紙商事に勤める

草津ウクレレ教室で毎週木曜日習い、一人芸で披露している。尺八は大師範の免許



津軽三味線教室の発表会にて　奥伝の資格あり

芸名・真田 決（またきます）でリピート要請が多い。演目は多種多芸。浪曲・紀伊国屋文左衛門も唸る。そら！バナナちゃん買うたア買うたア

若かりし24才頃の田中さん

左：三菱石油スタンドマン当時、中国地方での接客部門で優勝

寸劇・赤穂浪士　脚本、衣装作りからなんでも担当した

左：一人男女早や替わり「二人の大阪」を熱唱…大爆笑～